

帳簿調査と フィールドワークのあいだ

ミャンマーの茶産地で労働力を集めるしくみ

生駒美樹 いこまみき / AA研ジュニア・フェロー、AA研共同研究員

ミャンマーの茶産地では、農家が、チャ摘み労働者に対して米や現金を前貸しするなど、さまざまな便宜をはかっている。しかし、貸す側であるはずの農家が、労働者に対して負い目を感じている様子をみせることがある。この一見不思議なチャ摘みをめぐる人びとの関係について、農家の帳簿を手がかりに探してみよう。

ミャンマーの茶産地へ

ミャンマーには、チャを漬物にして食べる習慣がある。ミャンマー多数派民族ビルマ人の好みを表した「肉は豚、果物はマンゴー、葉物は茶」という言葉があるが、漬物茶「ラベツ」は、冠婚葬祭や来客時のもてなし、日常の食卓に欠かせないものである。現在、都市部では、民族を問わず茶を食す習慣が広がっている。



また、日常的に緑茶や紅茶を飲む習慣もある。漬物茶を茶うけに緑茶を飲みながら、あるいは喫茶店で紅茶を飲みながらおしゃべりに興じる人々の姿が、ミャンマーではよくみられる。

これらの茶の多くは、中国雲南省と隣接するミャンマー東北部シャン州で生産されている。あまり知られていないが、ミャンマーは、中国とインドという二大茶産地にはさまれており、国際連合食糧農業機関の統計によれば世界でも第8位(2017年)の茶生産国である。ただし、茶産地の多くは少数民族が暮らす山間地域にあり、長らく外国人の入域制限があったため、これまで文化人類学的な長期調査はほとんど行われてこなかった。そのため、わたしは大学院に入ったらぜひ茶産地でフィールドワークをしたいと思っていた。幸運にも日本でビルマ語を教えて下さって



調査を行ったP村。尾根筋に沿って住居が並んでいる。

*写真はすべて筆者撮影。

いた先生が茶産地出身というご縁があり、念願がかなって2012年からご親戚の家にお世話になることになった。なお、本稿では、加工品の場合は茶、植物の場合はチャと区別する。

チャとともに暮らす

調査に入ったシャン州ナムサン郡は、ミャンマー最古にして最大の茶産地とされ、主にモン・クメール系のパラウン（自称タアン）人が茶生産に従事している。標高1500から2000メートルの山並みの尾根筋に沿って村が点在し、斜面がチャ畑として利用されている。耕作地総面積のうち9割がチャ畑で、多くの人が何らかのかたちで茶生産とかかわりを持つ。

チャ摘み期の3月末から10月、村の生活は、チャを中心にまわっている。チャの収穫では、生長途上の新芽を摘むため、収穫に適した時期を逃さぬよう気を配ることが大切である。チャ摘みのタイミングが少しでも遅れると、葉が育ちすぎてかたくなり、高値がつかなくなってしまう。そのため、新芽の生長に合わせて、来る日も来る日もチャ摘みを行う。早朝、細い山道を歩いて畑に向かい、夕方かごいっぱいの新葉を背負って村に戻るという日々を繰り返す。また、新葉は収穫後すぐに酸化発酵が始まるので、その日のうちに製茶工場に販売に行くか、加工にとりかからなければならぬ。特に3月末から4月上旬の新茶の季節には、夜遅くまで製茶作業を行うことも多い。いそがしい毎日だったが、チャ畑に囲まれた村で、摘みたての青々とした新芽が香る茶を味わえるのはとても幸せなことだった。

チャ摘みの様子。両手を使って新芽を次々と摘んでいく。



人の背丈より高いチャ樹もある。



チャ摘みの合間にお茶を飲んでひと休み。

チャ摘みの労働力を集めるしくみ

チャ農家は、収穫適期にチャ摘みの労働力を確保すべく日々努めている。労働力を集めるための2つのしくみ——労働交換と信用貸し——をみてみよう。ひとつは、農家同士の助け合いで、1日分の労働力を交換し合うしくみである。農家は、先に収穫時期を迎えた人の畑に手伝いに行き、後日自分の畑の収穫のときには彼らに手伝ってもらう。もうひとつは、農家と労働者の信用貸しに基づくしくみである。農家は、労働者に米や油、豆、果物、薬、せっけん、少額の現金を無担保・無利子で前貸しし、労働者はその農家に労働力を提供することでこれを返す。労働者は、チャ園を全く持たないか、小さなチャ園しか持たない村民で、農家に頼らなければ生活が立ち行かない貧困層が多い。農家は、前貸しすることを「支援」と呼び、これによって労働者をつなぎとめている。

労働交換では、その日どれだけ収穫したのか、それがいくらで取引されたのか一切問われない。そのため、労働力が貨幣価値に数量化されたり、帳簿に記入されたりすることはない。一方、信用貸しでは、労働者の報酬は、日々変動する新葉の取引価格と収穫量に基づいて決められる。そして、労働者に「支援」する物品には値段がつけられている。つまり信用貸しに基づく農家と労働者のやりとりでは、労働力も「支援」された物品もすべて貨幣価値に数量化され、帳簿に記入されている。

チャ摘みをめぐる人々の関係に興味を持っていたわたしは、信用貸しで用いられている帳簿をひとつの手がかりに、調査をはじめることにした。

フィールドでの帳簿調査

帳簿の調査には思いのほか苦労した。手書きの帳簿は読みづらく、形式も統一されていない。また、略語や固有名詞が頻出するため、いちいち確認しながら読み解いていかなければならぬ。帳簿1ページを解読するのに丸1日を費やすこともあった。

ある程度帳簿の全体像がつかめるようになってくると、いくつか疑問がわいてきた。農家は、年に3~4回、労働者立ち合いのもとこれまでの彼らの報酬と負債を計算している。しかし、この場では計算するのみで、それを清算することはない。労働者の負債がかさんでいても、取り立てる様子もなければ、その金額を気にする様子さえない。これだけ詳細に帳簿をつけているのに、なぜなのだろうか。また、信用貸しは、経済的に余裕がある農家が、貧困にあえぐ労働者を「支援」という、経済的な優劣に基づ

く関係に見える。しかし、なぜか貸し手である農家の方が、借り手の労働者に対して負い目を感じている様子をみせることがある。調査を進めていくうちに、帳簿の数字から読み取れる彼らの関係と、フィールドワークからみえてくる彼らの様子に齟齬がみられることが分かってきた。

夕方、かごいっぱい生の生葉を背負って村へ戻る。



帳簿からみえないことと、帳簿の役割

帳簿上の数字にとらわれてしまうと見えなくなることがある。当初、わたしは、詳細に記入された帳簿をみて、農家が貨幣価値による等価交換を重視しているものだと思い込んでいた。しかし、実は、農家にとって大切なのは負債の回収ではなく、チャ摘みの労働力を確保することであった。彼らは、労働者に頼らなければ、チャ摘みを行うことができない。そのため、労働者の負債がかさんでも、チャ摘みに来ている限りはそれを注意することはない。新たな「支援」を断ることもない。「労働者が出稼ぎで大金を手にしたらしい」という噂を耳にしても、取り立てを行うことはない。必要なのは現金ではなく、労働力なのである。

では、農家は、なぜ詳細な帳簿をつけているのだろうか。実は、帳簿は、農家と労働者の関係性を可視化させ、長期的な関係の継続を動機づける重要な役割を果たしている。いつもお世話になっていた農家のMさんは5世帯の労働者を「支援」していたが、そのうち3世帯とは30年以上前からこの関係を続けている。日々「支援」している物品とその値段を帳簿に記入することは、意図しているか否かにかかわらず、労働者が農家に負っているものを目に見えるかたちで示すことになる。労働者は、農家から「支援」してもらっているという負い目を感じるからこそ、農家に労働力を提供しつづけるのである。逆に、帳簿をつけない労働交換では、短期間のうちに借りを返し、等価交換を成立させることが重視されている。

ところで、例外的に農家が、負債の取り立てを行うことがある。それは、労働者が負債を残したままチャ摘みに来なくなってしまったとき、すなわち、信用貸しの関係を解消するときである。このとき、はじめて帳簿上の金額が意味をもつ。

また、労働交換と信用貸しという、労働力の価値を算出する方法が2つあるという点に着目すると、「支援」する側であるはずの農家が、労働者に対して負い目を感じる理由が理解できる。農家の助け合いである労働交換では、等価交換の基準は1日分の労働力である。生葉の取引価格や収穫量にかかわらず、1日分の労働力は等しく同じ価値をもつ。一方、信用貸しでは、労働者の報酬は、当日の生葉の価格と収穫量に基づいて決められるため、日々変動する。生葉の取引価格が低い日や、収穫量が少ない時期には、1日中チャ摘みをしても報酬はわずかにしかならない。労働交換では、1日分の労働力の価値が等しく同じとされるにもかかわらず、信用貸しでは、それが等価でないことが貨幣価値に数値化されることにより可視化されてしまう。そのため、農家は、労働者の報酬が極端に少なくなってしまう時期には労働者に負い目を感じ、報酬に心づけを上乗せしたりする。こうして、彼らは収穫に必要な労働者をつなぎとめようとしているのである。

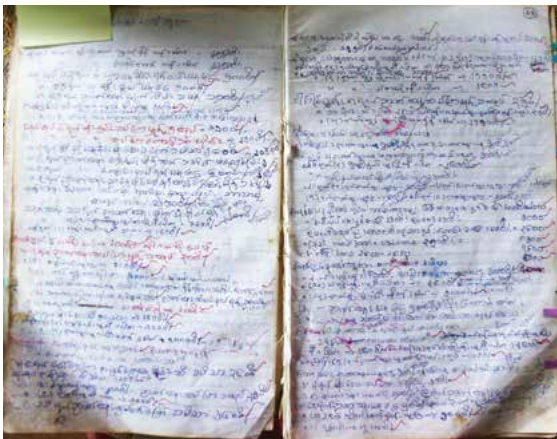
このように、帳簿とフィールドを何度も往復しながら、帳簿上の数字からはみえてこない関係を読み解くのが、フィールドワークの面白さのひとつだろう。



農家は、収穫量を記入した領収書を、労働者に手渡す。



負債帳簿には、品目と値段が詳細に書かれている。



帳簿を確認する。